

政治思想のソロー

——『コンコード川とメリマック川の一週間』における建国と時間をめぐって——

山 口 晃

一 はじめに

ヘンリー・デーヴィッド・ソロー（一八一七—一八六二）には、「改革論集」としてまとめられるような政治的エッセイが幾篇がある。その中でもっともよく知られているのは自らの市民的不服従を述べた「市民政府への抵抗」（一八四九年刊）であろう。この作品から彼の政治思想を考察していくことはできよう。しかし、個人的な経験を述べることを許してもらおうなら、私は以前、インドのM・ガンディーの政治的行為について論文を書いた際、彼の方法がソローのこのエッセイを肌身離さず携えていたことと結びついている事実を知りながらも、そのガンディー論でソローへの言及をためらい、ついに触れなかった。「市民政府への抵抗」を当時翻訳で読んだかぎりでは、ソローの政治思想といえるものをそこに見いだすことができず、宗教的現実家といわれるガンディーとの真のつながりが見いだせなかったからである。しかしその後、ソローの政治的とは見なされていない別の作品を読んで

いくにつれて、ソローの思想の中に、政治思想に行き着かざるをえない思考、記述を目にすることが多くなっている。

政治思想の水面に浮上してくるソローには二つの側面があるように思う。「場所」の感覚に非常に敏感なソローと、「時間」にじっと思いを凝らしているソローである。前者は政治的行為の問題につながっていく^②。後者はソローの政治思想の背景をなす「時間・建国」につながる。本稿ではソローの作品『コンコード川とメリマック川の「一週間」』をとりあげ、時間についてじっと目をこらしているソローを考えてみたい(以下の記述では、『一週間』と略すことが多い)。この作品には建国という政治にとって根本的なテーマが含まれており、政治思想のソローを考察するための序説となると思えるからである。

二 『一週間』という作品について

ヘンリー・ソローは、ニューイングランドの町コンコードで生まれ、人生のほとんどすべてをそこで過ごし、そこで死んだ作家、思想家である。彼が四四年間の生涯に刊行した著書は『コンコード川とメリマック川の一週間』(一八四九年)と『森の生活』(一八五四年)の二冊だけである。その他に彼は当時各地で活発に催されていたライシウム文化協会で講演を行い、その活字化されたものがエッセイとして雑誌に載ることはあった。ソローの講演はすべて原稿を読むものであったから、やや要望の多い演題の原稿は、逆に雑誌掲載を遅らせた。活字になってしまふとその演題の講演依頼が来なくなることもあり得たので。それに対して、著作として刊行されたこの二つの作品は、執筆、刊行において、さらに出版後の自らの著書に対する態度において、エッセイとは非常に異なるところがあっ

た。たとえば、ソローの死後、彼を世界的に有名にする先ほど述べた「市民政府への抵抗」つまり「市民的不服従」は、雑誌掲載の依頼があったとき、たまたま彼は『一週間』の校正の真つ最中であつたため、ほとんど原稿は推敲することなく出版社に渡した。つまり明らかに『一週間』の方に重心が置かれていて、エッセイは講演原稿に他ならなかつた。同じく彼の比較的多く講演された社会的エッセイ「原則のない生活」も、雑誌掲載の話が持ち込まれたとき、彼はすでに死の床にあり、自らペンを握つて推敲できる状態ではなかつた。何度もタイトルを変えたこの講演を「原則のない生活」にしようとして出版社と合意したが、そのときソローのなしたことであつた。(ちなみに「市民的不服従」の講演回数は二回、「原則のない生活」は八回である。)それに対して、『森の生活』は刊行までに八回の大幅な推敲を経ている。『一週間』は『森の生活』ほどではないが、長い時間にわたる執筆過程と推敲を繰り返している。そして『一週間』に特徴的なのは、この本は惨憺たる売れ行きであつたにもかかわらず、著者ソローは出版後も、何年にもわたつて推敲を続けたことである。しかも千部刊行(実質的に自費出版に近い)のうち七百部残っていたが、彼は再版の考えを死の床に至るまで捨てていない。

それではこの『コンコード川とメリマック川の一週間』はどういつた内容の本であつたのか。『森の生活』の一・三倍の分量があり、ソローのすべての著作の中で一番大部である『一週間』はまだ日本語訳がないため、一般にはその内容についてほとんど知られていないので、本稿の議論のためにも最小限の内容説明は必要であろう。一八三九年八月三十一日から九月十三日にかけて、ソローは兄ジョンとともに川旅に出かけた。川は自分の町を流れているコンコード川であつた。舟は自分たちで造つた。二週間の旅の間、一週間は上陸し、山に登つた。この川旅についての物語が一〇年後、『コンコード川とメリマック川の一週間』として刊行される。メリマック川はコンコード川の本流である。ところが刊行されたこの作品の内容は、川旅そのものの叙述は全体の四割にすぎなかつ

た。川および川辺の情景の描写と連動しながら、あるいは横道にそれながら、ソローは残りの六割を、ニューイングランドの歴史(地誌)、ヨーロッパ文学、ヒンドゥー教徒の古代の知恵、ホメーロスやオシアンのような叙事詩、そしてアメリカ先住民について語ることに費やした。

このように概略を述べると、『一週間』は川を漂いながらの文学的随想と受け取られるかもしれない。伝記作者はこう述べる。「本のおそらく四割を占め、兄弟がどのように旅をし、何を見、どこでキャンプをしたか、通過した場所の歴史など、非常に率直に語られている。もしこの部分だけが出版されたのであれば、成功したであろうと想像できる。うまくなめらかに書かれた楽しい夏の読み物となり、すぐれた本にならなかっただろうが、人気を博したかもしれない。」³ではソローはこの本で何を書こうとしたのか。多くの要素を含み入り組んだ著書であり、同時にたがたび横道に逸れるこの本を、濃縮することは難しい。しかし、時間をめぐる根本的な考察が本書の核にあることは、認めてよいのではないだろうか。ペンギン・クラシックス版『一週間』の編注者H・ダニエル・ペックは、『森の生活』と比較しながら、『一週間』における時間に焦点を合わせた解説を付している。以下それに依拠しながら、『一週間』の思想的内容を見てみよう。

『森の生活』は非常に有名である。⁴しかし『一週間』が『森の生活』と構想および執筆において一時期並行して進められていたこと、あるいはソローは両著作を連続する時間の中で刊行するつもりであったことは、あまり知られていない。⁵次に本書の思想的内容にかかわる大切なこととしてタイトルの変遷がある。最初はソローは漠然と「ある旅の回想・自然とのおしゃべり」を考えていた。しかし一八四二年の兄ジョンの死を契機にこの本は挽歌の性格を取り始める。原稿執筆当初のタイトルは「コンコード川とメリマック川の旅」である。それが執筆の進行と推敲の中で「コンコード川とメリマック川の一週間」に変わる。つまり空間を通しての旅から、時間における旅に

深化する。そして本書は全篇、時間すなわち回顧の物語という根本的な性格を帯びていると了解してよいだろう。ベックは一例をあげ、解釈を加える。「木曜日」の章に、ハンナ・ダスタンと彼女の仲間たちによる、先住民たちからの身の毛のよだつ、ニューイングランド地方で知られている逃亡の場面が叙述される。この出来事については、本稿(三)でやや詳しく政治思想の側面から見るので、今はそこに内包されている時間との接点についてのみ触れる。この逸話を書くにあたってソローは歴史的説明によりながらも、物語を鮮やかに再構成していく。眠っているインディアンたちの頭皮をハンナが剥ぎ、野営地からの逃亡を叙述する中で、ソローは突如、現在時制を採用する。彼自身の歴史的時間とハンナの歴史的時間が融合する。「この行動は早朝になされた。そして今、疲れ切った女たちと少年は：炒ったトウモロコシとムースの肉を急いで食べている。その間、カヌーは、幹が相変わらず川岸に立っているマツの根よりも低い位置を進む」。そしてソローは再び過去時制に戻り、歴史家の声によって、その記憶を終わらせる。ここでベックは、ソローはニューイングランドをめぐって「自らの想像力で歴史を作りつつある」と解釈する。

このように『一週間』は現在と過去との継続する対話を示しているのであるが、この対話はしばしば「生気溢れる豊かな過去から、貧弱で略取された現在への衰微を示している。」⁽⁷⁾ソローの示し方は二重、三重、四重の意味で平板でない。まず人々と物の喪失がある。旅の初日(「土曜日」の章)でソローは川の過去から影のような人物を思い出す。年とった茶色のコートに身をまとった男。「この川のウォルトンであり：穏やかな午後、川に没入するのがいつも見られた。この老人が最後は、村の端にある屋根の低い家」へ消えていくのを見る唯一の目撃者はソローであることを記しながら、こう述べる。「他には誰も彼のことをよく知らなかったと思う。今では誰も彼をおぼえていない。と言うのも、その後ほどなくして亡くなり、新しいタイン川の流れに戻っていったからである。」⁽⁸⁾

ここではニューイングランドの進取の気性に富む人間でも、敬虔な清教徒でもない、いわば無用者に光を当てることで喪失感が喚起されている。それによって衰微はソロー独特のいつその奥行きが表現されている。

次に注目しなくてはならないのは、衰微と回復には、こうした個人的な人物だけでなく、文化も含まれていることである。すなわち衰えてきているニューイングランドの共同体が問題となる。たとえば「日曜日」の章で、ビルリカの古い村を通過する。今では「古いぼれ」「農場はすべて退化し、公会堂は灰色になり老齢に苦しんでいる。」^⑨ 『一週間』の中でソローが描くように、ニューイングランドの風景はこのような共同体の廃墟で覆われている。

それでもビレリカのような初期清教徒の共同体は、少なくとも自らの存在を示す歴史的説明・記録を残した。しかしこれらの記録には、別の共同体、つまり先住民の徹底した消滅が示されている。先住民の文化は書かれたものでなく、口承によるものであったので、ニューイングランドの風景からの彼らの抹消は、清教徒の植民者たちが消えて行くのより、はるかに完全であった。ソローは青年期からずっと先住民の遺物を集めてきた。矢尻を見つけるのは特技でさえあった。彼にとつて矢尻に代表される先住民の遺物は神聖な感覚を喚起するものであったので、その感覚の喪失は自らに引き寄せて悲劇であった。「この夜明けのように蒼白な白人は、思考という重荷を背負っている。彼はかき集められた炉の炎のように、その知性はまじろみ、自分の知っていることは十分よく知っているのだが、大雑把に解き当てることはせず、こまかく計算する。…耐久性のある、枠組みで家を建てる。彼は先住民のモカシンや籠を買い、それから獵をする土地を買う。ついには先住民が埋められている場所を忘れ、その骨を掘り起こす。」^⑩ だから『一週間』においてソローのあがない(回復)の歴史形成のもう一つの目的は、先住民の失われた世界の何ものかを回復し、彼らに声を与えようとする試みである。^⑪

ソローの失われた過去の回顧と、その回復の物語で見落としてならない要点は、過去の人々、だけでなく、場所を

含んでいることである。そして場所の変形あるいは場所の浸食は、人間の介在によってしばしば起こる。序章「コンコード川」においてサドベリー川岸辺の農民の証言を伝える。「堰が作られてから数千エーカーの土地が今では水に覆われる。以前そこに白いスイカズラとクローバーが育ち、夏は靴をぬらすことなく歩けた。今は、イネ科の雑草、スゲ、サヤヌカグサだけが一年を通して水中に立っている。」¹² 鉄道と他の産業も、風景に衝撃を加え続ける。「火曜日」の章で、場所に結びつけて水運の本質的な変容をソローは記す。「私が旅をした頃から、鉄道が拡大してきて、今ではメリマック川の船による輸送はきわめてわずかである。あらゆる種類の天然の産物や必需品が以前は川で運ばれていた。しかし今では流れを遡って運ばれる物はない。」(日本の明治期における鉄道の導入と水運の衰退は、そのわずか一世代後にすぎない。)ソローは続ける。「閘門^{ロック}は急速に廃れつつある。閘門を修理する費用は通行料金でまかなえなくなるだろうから、じきに通行不可能になるだろう。だから数年でこの川の輸送も終わりを迎えよう。」¹³

ベックはここでソローの喪失の感覚は『森の生活』とくらべ、「開かれて」いると言う逆説的な見解を述べる。

改革と自己再生のヴィジョンの『森の生活』で、ソローは「隣人たちを目覚めさせ、：朝の雄鳥のように歌い」と言い、その結果、喪失の問題は一貫して外に置かれる。それと対照的に、『一週間』は歴史的にも個人的にも喪失の争点に直接かかわっている。無時間の牧歌ではなく、時間の中の旅としてこの著書自体が構成されているのである。たとえば「水」をめぐる背景に、二つの著作の相違が見て取れる。水は『一週間』では時間と記憶の流れていく川である。『森の生活』では、寶石のように静止した湖である。ウォールデン湖はソローが『森の生活』の中で Wallied-in 「壁で囲まれた」と言葉遊びをしたように、時間に浸食されていない。¹⁴ それに対して『一週間』は歴史と自然の双方が変化と出会うことの上に形作られている。ベックが「開かれて」と表現したことの意味で

ある。¹⁵⁾

『一週間』と『森の生活』は時間の濃縮をめぐっても重大な相違を示す。『森の生活』では湖での二年と二ヶ月を、季節の一年間のサイクルとする。それに対して『一週間』では時間の超越は起こりえない。この川旅の肝心な点は、時間の流れの中に入っていく、時間を理解しようとするところだからである。『森の生活』における時間の濃縮は、時間を超越した「年」として彼の経験を統合する。『一週間』では、旅本来の性質がそうであるように、出発と帰還という古典的な構造の中に統合される。¹⁶⁾

すでに述べたように、ソローの『一週間』と『森の生活』は執筆の時期が部分的に重なる。ソロー自身は連続して出版するものと考えていた。にもかかわらず以上見てきたように、この両著作には根本的な相違がある。『森の生活』をもってソローの思想を代表させることは執筆当時のソローから考えても、適切なことではない、といえるであろう。とりわけ政治思想のソローを考えようとなると、対をなす両著作の片方である『一週間』はさらに無視しえないものとなる。

三 建国について

この節では『一週間』がどのように政治思想と共振しているかを見てみたい。ボブ・ペパーマン・テラーは『アメリカの物知りおじさん・ソローと政体』の中で、建国に焦点を絞って、興味深い分析を進めているので、ここではそれを中心に考えてみたい。まずテラーは、アメリカの政治思想史において、これまでソローが正面から取り上げられることがなかったことを詳述する。たしかに個人主義者、アナキストとしてソローをとらえ、彼の

諸々の著作が公共的な政治の世界といかにかみ合わないかを扱った論文は多い。しかしテラーはソローの作品一つ一つを政治思想の観点から読み解きながら、従来の見方が誤解に基づくものであることを説明する。そしてむしろソローの非政治的と思える作品の中にこそ、政治的共同体についての批判的な政治思想を見ていく。最初に取り上げる作品が『コンコード川とメリマック川の一週間』である。テラーはこの作品に政治のもっとも根本的な主題である建国(創設)を読み解いていく。(同様にソローの作品『コッド岬』に「友愛」を、エッセイ「市民的不服従」に「抵抗」を読む。)『一週間』に含まれる建国に向けられるソローのまなざしを間近でとらえてみよう。

ソローは二十歳の一八三七年十月二十二日から、死の直前の一八六一年十一月三日まで二十四年間、日記をつけるが、その日記を彼に勧めたのは、ラルフ・ウォルド・エマソン(一八〇三〜八二)であった。エマソンも膨大な日記を書き、自らそれを「貯金銀行」と呼んだ。他方、伝記作者によつては、ソロー最大の傑作は日記であろうと言ふ者もいる。ソローが日記を書き始める前年(一八三六年)にエマソンは彼のそれまでの思索を結晶させた『自然』を刊行する。ソローはその影響圏にあり、それは『一週間』執筆時も、刊行時においても続いている。しかし『一週間』にはエマソンの思想と根本的に異なる側面があることを、テラーは指摘する。「エマソンは、私たちに制約する伝統、習慣、歴史と彼が考えるものから、過去とはつきり断絶し、新鮮で、新しく、自由な実在を作り出す方へ向きを変えるよう私たちに教える。これは彼の最初の著書『自然』のメッセージであり、「それ故に、あなた方自身の世界を作り出しなさい」という読者への励ましで閉じられている。：エマソンが求めた自由は歴史を超えた自由である。」¹⁷⁾ふつうソローはエマソンのこの見方に同意していると考えられているので、ソローの政治思想を解釈しようとしても、こうした方向では社会生活および政治生活を考える視座はむずかしい。そして社会的、政治的現実に対してソローの見方は、「幼児的」であるという結論へと進んでいく。

しかしテラーは、エマソンとソローの見方は異なっており、その相違は『一週間』において劇的な形で表れると指摘する。⁽⁸⁾「この作品においてソローは、とりわけ先住民とヨーロッパからの移住者の関係を調べることで、アメリカの植民史に没頭している。私たちが過去から逃避させたり、私たちの共同の生活を含んでいる社会的遺産や決定力のある事実から私たち自身を引き離すどころか、ソローは同時代のアメリカ社会を生み出した歴史的な出来事、状況、戦いに対するたくましいそして啓発的な見方を提供する。ソローと彼の兄がコンコード川とメリマック川を旅するとき、自然は彼らに「世界の処女地として」与えられていない。それどころか彼らは、異なる秩序の対立から結果する、犯罪、暴力、勇敢な精神、悲劇で満ちているこの自然の中に、社会的な世界を見いだす。」⁽⁹⁾

ソローは終生、当時としては破格の深さで、先住民に関心を抱き続けた。彼の死後出版された『メインの森』に描かれる先住民ジョゼフ・ポリスは、ソローにとって言葉の真の意味で英雄であった。また、『一週間』はソローのすべての著作の中で先住民への記述が量・質ともに群を抜いている。しかし先住民社会と白人社会の関係の性質を突き止めることは、一つの「民族」がもう一つの「民族」を全滅させる物語でもあった。「ソローの意図は、私たちの社会に関するこの決定的に重要な真実を、私たちに忘れさせることではなく、私たちの建国はすべての建国と同じように血なまぐさく、不正であることを私たちに思い出させる。」⁽¹⁰⁾

だが、『一週間』を読んでいくと明らかになることであるが、この流血の建国へと通じ、それを超えていくこの歴史過程をソローは複合的、両義的に説明していく。と言うよりソローの思想と作品に即して言うなら、彼の処女作『一週間』においてすでに、彼の複合的で両義的な表現は中心的特徴をなしていると言った方がよいであろう。そして象徴的にも、彼が通過する最初の目印は革命(独立)の最初の戦闘が行われたコンコード北橋の遺跡であった。郷土コンコードの北橋がソローの政治思想を考える際、いかに重要な地位を占めているかは、どんなに強調し

でもしすぎることはないであろう。⁽²¹⁾しかしこれはアメリカの始まりを発見する彼の旅の始まりに他ならない。つまりソローは時間をさらに遡っていく。「白人と先住民の間の経済的な商取引が「合意により」、何らかの脅迫や欺瞞を含むものでないとしても、その結果は恐るべきものである。先住民の社会秩序全体は、財産所有権と白人の商業形態との接触を通して、掘り崩される。その行き着くところは絶滅である。このような絶滅のおそらく最悪の結果は、「記憶の喪失」である。⁽²²⁾先住民共同社会とその秩序へのソローの目の向け方は、植民者共同社会とその秩序を見る見方と異なっていない。彼にとつて先住民社会は特異な現象ではない。ソローはこう述べる。「もし私たちがほんの少しの間でも先住民の詩神の歌に耳を澄ますなら、彼らが文明と野生を交換しようとしぬ理由を理解するであろう。異教徒は気まぐれではない」⁽²³⁾

ソローは続けて、先住民の改宗、ウィカサック島の物語、それに対する白人社会の地方集会の対応、フライ従軍牧師とラヴウエル隊長のこと、白人の植民は先住民との対立だけでなく先住民自身をも分裂させたこと、さらに毛皮商ヘンリーと先住民ワタムの友情の物語を語る。テーラーはこうした事例のとりあげ方について次のように述べる。「ソローの省察、まさにこの本がアメリカ社会について含んでいる批判は、建国というこれら最初の残忍な行為に徹底的に依拠している。彼が語る物語から彼自身を免除するどころか、ソローはその真ん中に自らを位置づける」⁽²⁴⁾しかしここでは枚数の関係もあるので(二)で時間との関係で示唆的に触れただけであったハンナ・ダスタンの物語をさらに詳しく見ることにしよう。

ハンナ・ダスタンは襲撃してきた先住民たちによって産褥から連れ出され、「自分の生まれたばかりの赤ん坊が頭をリングゴの木で叩き割られる」のを見る。そして子守のメアリー・ネフとイギリスの少年サミュエル・レナードソンといっしょに捕らえられる。彼女と子守は先住民部落に連れて行かれ、そこで「裸にされ鞭打ちの刑を受け

る」ことを知らされる。これを避けるためダスタンは少年に先住民の男から人の殺し方と頭皮の剥ぎ方を聞き出すよう促す。その晩、彼女たちは聞き出した知識を利用して先住民全員を殺した。犠牲者は男二人、女二人、子供六人であった。それから自分たちがそれを使って逃げるカヌー一艘をのぞいてすべてのカヌーに穴を開ける。追跡を遅らせるためである。彼女たちは逃げ始めるが、すぐにこの苦しい体験の証拠として死者たちの頭皮を剥ぐために立ち戻る。それから六〇マイルほど首尾よく漕いで、ジョン・ラヴウエルの家まで行き、救助された。地方集会は彼女たちに一〇個の頭皮に対し五〇ポンドを与えた。ダスタンは赤ん坊をのぞいて襲撃を生き延びた家族全員に再会した。ソローはこの物語を次のように締めくくる。「後年、そのリングゴの木の実を食べたと言う者は多い。」これにたいするテーラーの分析は解釈の域に達している。「ダスタンの赤ん坊が殺害されたあの木である。「私たち」はこの恐るべき事件の受益者であり、その産物である。「あのリングゴの木を食べた」ことがあるのは、「私たち」だからである。」⁽²⁶⁾

しかしこの物語には、それまでソローが取り上げてきた先住民と白人の出来事との相違もある。従来は非戦闘者であった女性と子供が決定的に重要な役割を演じている。残虐的行為はもつとも罪のない者である子供たちに向けられている。そしてこの残虐的行為は、男たちの戦闘におけると同様に、一方の側に限られていない。先住民はダスタンの赤ん坊を殺害する。しかし今度はダスタンが組織的に六人の子供を殺す。テーラーはここで『一週間』における建国を次のように解釈する。「先住民と植民者の間の暴力と敵意は、伝統的な抑制がすべて消えてしまう地点にまで達する。そこではもつとも弱い者が有望な獲物であり、共同体の全成員が戦闘者である。独立戦争ではなく、まさにここに、アメリカの建国の頂点がある。」⁽²⁷⁾(傍点引用者)

ソローはなぜこれほどまでに先住民と植民者との関係にこだわるのか。そこには困難な、しかし非常に重要な問

題が含まれているように思う。テラー自身は、私たちが自らの社会と自らの過去から逃げるができないことをソローは『一週間』において主張したこと、そしてその政治的創設(建国)で生じた恐怖と非人間性から目を離さないことを、伝える。ソローは先にも触れたように独立戦争の開始を象徴するコンコード北橋とそこで戦ったコンコード住民への深い思いがある。だが、彼は時間をさらに遡る。その意味は何なのか。テラーの説明ではこの点に関しては十分にわからないように私は思う。

このあと数頁にわたって、テラーは『一週間』の中に政治思想を読み取っていくのであるが、それは彼の解釈に属する部分である。分析的なその解釈は、ここでもっとも深いところに達しているように思えるので、ていねいに読んでみよう。「著述(writings)」を通してソローは、基本的な意味で歴史の限界を超える人間本性(human nature)の観点に身を捧げている。だから彼は古典文学に没頭しているのである。『一週間』の中で述べられているように、『イーリアス』はこれまで書かれた最も優れた書物にはいる。⁽²⁸⁾(傍点引用者)「著述」が複数形になっていることからわかるように、『一週間』だけでなく、ソローの諸々の作品からということである。歴史に左右されない人間本性に対して、変動する歴史が対比されている。「だから」は、そうした人間本性に依拠する古典と、近代における人間の変化可能性との対比が裏側に示されていると見てよいだろう。「しかし、また先住民と植民者の対立に光を当てるとき、私たちは相異なる社会秩序(social orders)は重大な、時によると橋を架けることの難しい深淵を人間の間に生み出すことも知っている。毛皮商人ヘンリーとワタムという二人の友人がそうであったように、個人が対等の人間として相互に文化的な相違を克服することができるときでさえも、時とすると巨大な社会的圧力が彼らを引き裂くように介在してくる。」ここでは秩序が非常な緊張感の中でソローにおいて考察されていたことを示唆している。秩序(orders)が複数形になっていることの緊迫感、安易に「一なるもの」へ進む手前に

いる、あるいは手前で踏みとどまっているソローをテラーは示唆している。「しかしながらこの根本的な障害にもかわらず、ソローはこうした物語の中で行為者たちの共同的な失敗と美德 (common failures and virtues) を示すことに成功している。…白人と先住民の生活様式の相違にもかわらず、勇氣、忠誠心、博愛といった美德は「自然本性のもの (nature)」として、両方の共同体の成員にとって基本的な性質と潜在性を含むものとして、普遍的な人間性の土台として、認識できるものである。…しかし彼は文化と相異なる生活様式の力と、文化的相違が彼の見解を特徴づける複合性に、決して目を閉ざさない。」ソローの著作には、固有な独自の文化と、変わることはない人間本性の双方にたいする承認が随所に見受けられる (人間本性とソローについては本稿(四)で具体的に取り上げる)。その中でも『一週間』の先住民と白人の出来事はそれをもっとも鮮明に現れていると言つてよいであろう。その際ソローが、どの文化にも遍在しているものとして勇氣、忠誠心、博愛といった美德をあげたことは注目せねばならない。これらは経済の領域や、ゴシップの行き交う日常生活の領域のものではなく、政治的行為を成り立たせる根本的な要素だからである。

さて、以上のようにテラーの分析は、政治思想のソローを考えるために、有益と思えるところが多い。にもかかわらず、テラーのこうした説明では、ソローが独立戦争で踏みとどまらず、なぜその先まで遡ったのかという問いが残る。ソローが生まれたとき、独立戦争から四〇年しかたつていなかった。だから、『コッド岬』に登場する白髪交じりの老人のようにジョージ・ワシントンをおぼえている人がいた。ソローは老人の話に真剣に耳を澄ます。また、一八五一年四月三日、一七歳の黒人逃亡者トマス・シムズが、ボストンで逮捕され、奴隷制廃止論者たちは組織を作り救出を試みたが、四月十二日、シムズは連邦執行官と州兵の監視の下、ジョージア州に連れ戻され、瀕死の状態になるまで鞭で打たれた。ソローは数日間わたり日記で怒りをぶちまける。そのときもソロー

は、一七七五年四月十九日(北橋事件の日)と一八五一年四月十二日を比較するのである。²⁹⁾ソローには政治的出来事を考える一つ重要な尺度として、独立戦争の北橋がある。そして二つの出来事にたいするコンコードの住民の対応の違いに言及する。つまり同時代の住民にはソローから見えて落差がある。ただ、後者の出来事でもボストンの波止場で祈りを捧げたのがコンコードにいたことのあるダニエル・フォスターであったことがわずかな救いであったのだが。もしソローの政治思想をここにとどめて考えるのであれば、政治思想のソローはもう少しわかりやすいものになるだろう。そして近代の政治理論の了解範囲で解釈できたであろう。しかしソローはそこにとどまらなかった。ソローを見えにくくしているものがここにある。ソローがコンコード北橋でとどまらず、なぜ時間的にさらに遡る旅をしたのかという問いは、日本のある社会思想家が獄中において、また異国の地モロッコにおいてもなぜ古事記を読み続けたのかという問い、また西洋のある政治哲学者が最晩年にいたるまでプラトンの作品の中でもなぜ宇宙の発生と構造に関する対話『ティマイオス』に言及し続けたのかという問いと、同質のものを私は感じる。³⁰⁾そして本稿に関して言うなら、ソローが終生、意識していた「場所」への感覚、そして次節で述べる「変わらないこと」へのまなざしが、この問いにたいする何らかのヒントを含んでいるのかもしれない。

四 変わらないこと

ソローがエマソンといつから親しく知り合うようになったかは、いくつか説があり、最初の出会いの正確な日付はわからない。しかし一八三七年の秋、単なる面識から真の友情へと発展し始めていた。そしてすでに触れたようにこの秋からソローは日記をつけ始めた。その一ヶ月後の十一月から、翌春三月にかけての日記の断片をつないで

いくロバート・リチャードソンの洞察は示唆に富むもので、少し長くなるが引用してみよう。「十一月にウェルギリウスを読みながら(特徴的なことであるが、『アエネーイス』ではなく『農耕詩』であった)ソローは、葡萄の木でふくらむ蕾と、木の下に散らばる果実についての文に、深い感銘を受ける。彼の言うところによれば、「同じ世界であった」という点である。そこから当然の成り行きとして：もしウェルギリウスの世界が私たちのと同じ世界であるのなら、「同じ人間がそこに住んでいたのである。」ウェルギリウスの時代から私たちの時代まで、自然ネチャーそして人間ヒューマン・ネイチャー本性は本質的に変化しなかった。ゼノンやストア派の哲学者たちは同じことを教えた。「ストア派のゼノンは私と同様に、世界にたいして全く同じ関係の中にいた。」そしてホメーロスを読むことで再び同じことがはつきりした。三月の初旬、ソローは日記に書く。「三千年間、世界はほとんど変わらなかった!『イリアード』は自然の音のように思え、それは私たちの時代に反響している。⁽³¹⁾」

自然と人間本性の永遠性、すべての時代の等価についてのこの信頼は、若きソローの最も重要な確信であった。ただけでなく、その後の彼の思想と作品を見る際に、常に会おういわば彼の持続低音であるといつてよいであろう。古典への愛着はソローを一生彩るものである。今引用したこの秋、ソローが熟読した作品は、ゲーテの『イタリヤ紀行』であったが、それはゲーテが古代の中枢地域であったローマに近づいたときの抑えることのできない興奮、弱められていない力、時間によって減じられない偉業を扱った本であったからである。⁽³²⁾同様に最晩年、国の中は南北戦争のさなかにあり、ソローは病が悪化しつつあったが、彼が熱心に読んでいたのは、ヘロドトスとストラボンであった。またその頃彼がエマソンの書齋から借りるのが目撃された本は、プリニウスであった。⁽³³⁾それは近代へのソローの距離の置き方を示している。

しかしソローの生きた時代にさらに目をこらしてみると、今述べたソローの古典への愛着と深く対峙すると考え

てよい一つの運動が、アメリカで、とりわけこの時期、人々の関心を集めていた。一八四四年に目をこらしてみよう。この年はすでに触れたようにエマソンがコンコードの第一教会で奴隷制廃止運動支持の演説をした年であり、さらにソロー家は初めて借家でなく自らの家を建てることになり、ソローは半ば大工の仕事を引き受けた。他方『一週間』の草稿が出来上がったこともあり、精神的に高揚していた。しかし実はこの年、ソローの周辺ではまったく別のある社会的な運動が一つの頂点に達そうとしていた。

キリストの再臨は間近いと主張する運動は古くから教会にあつたが、フランス革命とナポレオン戦争後のヨーロッパの困難な状況の中、この運動は各地で勢いを増した。特に北アメリカに起こった運動はもつとも勢力あるものだった。ニューヨーク州に住むバプティスト派の農民ウィリアム・ミラー(一七八二―一八四九)が一八三一年頃から、旧約聖書のダニエル書の預言に従って計算するとキリストの再臨は一八四三年と四年の間起こると説いたことに端を発して、数千人の信者を得た。彼らによると、一八四四年十月二十二日は世界最後の日になるはずであった。その日が近づくにつれて、再臨派の信徒たちは丘の上で、その日のためにたてた屋根のない教会で待った。ソローの伝記作者ロバート・リチャードソンによる興味深い描写を引用しよう。「コンコードの中および周辺では、人々は収穫をやめ、仕事を他の人に任せてしまった。卵は十月十八日一ダース十八セントで小売りされ、七面鳥は一ドルであった。十月二十三日、動揺している再臨派の信徒たちに夜が明けたとき、卵はやはり一ダース十八セントで、七面鳥は一ドルで売られていた。²⁴これは当時の地方紙を資料にしているの、コンコードのふつうの人々もこの話には、二十二日の直前、相当影響を受けていたことがわかる。

ではこの動きにたいするソローの反応はどうであつたらうか。ソローの日記にミラーへの言及は見あたらない。その代わりに、彼は次のような文章を書いている。「ニューイングランドで実を結んだ「ミルク草の」種子がペン

シルヴァニアで芽を出すこともある。：いずれにしろ、私は秋が仕掛けるこのすべての冒険や成功に興味がある。このために、この絹の吹き流しは夏じゅうかけて仕上げられ、この軽い収納庫に小綺麗に納められ、この目的に完全に適応するようになっていなのだ。この秋のみならず未来の春の予言者なのだ。だが、世界はこの夏で終わるというダニエルやミラーの予言を信じてきよう、一方でミルク草が誠実にその種子を成熟させているのに。⁽³⁵⁾一八三七年、二十歳のソローをおそった自然と人間本性の永遠性、時代の等価は、七年後の「世界最後の日」の予言を全く気にとめない。ソローにとってはむしろ空に舞い上がるミルク草の綿毛の種子こそ、春の予言者なのであった。

また『一週間』の中にも次の叙述がある。その前後すべてを引用したいのだが、長くなってしまっているので部分引用とする。「風で水面は無数に波立ち、しぶきが顔を打ち、アシとイグサがそよぐ。自然はみずみずしさに溢れている。何百羽ものカモは、湿って冷たい風を受け、打ち寄せる波の中、おぼつかない様子で、今にも飛び立とうとしている。相場師のような騒々しい声や口笛のような音をたてながら、風の抵抗を少なくするためにたたんだ翼で激しい風に立ち向かい、ラブラドルへ向かってまっすぐ飛んでいこうとしている。：克蘭ベリーは波の上で揺れ、岸辺に打ち上げられる。小さな赤い舟(実)がハンノキの間を間切って進んでいるかのようだ。世界の終わりはまだ近づいていないことを証明するような平和な自然の喧噪。そこにはいたるところにハンノキ、カンバ、オーク、カエデの樹が生き生きと茂り、水が引く時季まで蕾を抑えている。」⁽³⁶⁾自然の喧噪と時季を待つて蕾を抑えている木々を取り巻く実在が、「世界の終わり」を押しつけている。

この点にかかわることだが、私はソローの博物誌の文章を読んで、不思議に思う箇所にあたたび出会う。たとえばソローのエッセイ「秋の色」(彼はこの演題で四回講演をした)の随所で「早くも十月五日に」とか、「十月

十七日までには」というように、紅葉の叙述にきつかりとした月日を入れるのである。⁽³⁷⁾ 聴衆に具体的な日を知らせることで、季節の臨場感を作り出す目的はあつたであろう。しかしそれだけだったのだろうか。ソローが最晩年にまとめていた『野生の果実』に結実する文書の中でもこうした月日は記述される。⁽³⁸⁾ もちろん講演用の文章ではない。明らかに来年もこの日に、そしてこれからもずっと……と想定しての、具体的な日付であるように思えてならない。ここには「世界最後の日」の入り込む余地はない。

こうしたソローの基盤(持続低音)と、いま触れた彼の時代を包んでいた背景は、政治思想のソローを考える際に、私は非常に重要な事柄であると考えている。この二つの面を念頭に置いて改めて『一週間』に即して見てみよう。最終章「金曜日」にソローは次のような文を記している。「変化に私の思考が敏感になるとき、これまですつと知っていた岩に座って眺めるのが私は好きである。そして岩の苔の様子をうかがい、それがしつかり定着し不変であるのを見る。永遠に灰色である岩の上で私はまだ灰色(老年)でない。常緑樹の下で私はもはや若く(グリーンで)ない。時の流れの中にさえも、その流れによって時が自らを回復する何かがある。」⁽³⁹⁾ 出だしの「変化に私の思考が敏感になるとき」というのは、実にソローらしい表現であるが、時流のこと、現象に心が行ってしまっているとき、という意味であろう。

ダニエル・ベックはこの文章を導きの糸として、次のような分析を進める。時間が自らを回復する能力についてのソローの自覚は、ソローの時代の新しい地質学、とりわけチャールズ・ライエル⁽⁴⁰⁾の理論の深い読みを通して可能になると考えられる。ここで留意すべきは次の点であろう。ライエルは急激な、破局的な変化についてのこれまで理論、およびそうした理論を支えている聖書的な説明に反対し、極小のゆつくりとした少しずつのそして循環的な、地表の展開を対置する。「聖書的な説明」とは、黙示録的な叙述と考えてよいであろう。ライエルはこの地質

学的な時間の特徴付けることによって、変化の過程の中に回復の次元を見いだす。そしてベックはこう続ける。「地質学的な時間の連続体の中に自らを置きながら、ソローは岩の「不変さ」とそれらの親しみやすさ（「私はずっと知ってきた岩」）による長期的な見方の中に、慰めを見いだした。短期的な混乱（断層）と動揺、不安をもなう「歴史」によるのでない、連続し統合されたこのような見方によって、人間の変化は、そして喪失の非常な苦しみをさえも、吸収され、理解されるだろう。」⁴¹

私は『一週間』における時間を地質学的観点からおこなうこの分析を、了解する。しかし、『一週間』を読みながらたびたび思うことであるが、ソローの思考は自然科学、社会科学、人文科学と分かれる前の、*scientia*つまり原初的な意味での *science* に近いものであるように思う。『一週間』における次の二つの叙述に私の目は留まる。「月曜日」の章で、夜、遠くで初心者らしい者による太鼓の音を聞いたときである。「たしかに、取るに足らない太鼓奏者であったが、彼の音楽は私たちに、最良の自由な気持ちにさせる時間を与えてくれた。これ以上ないほどふさわしい巡り会いであると感じた。この単純な音が私たちを星に結びつけた。そうなのである、この音には非常に力強い論理があったので、人類という共通の意識を持つてしても、私がこの音が伝えてくれる決定に疑いを差し挟むことはなかったであろう。鋤が地球の外皮を通して人類という耕地を突然深くえぐったかのように、私は習慣的な考えをやめる。…突然、古い「時」が私に目配せした。ああ、あなたは私を知っている、あなたは悪い苗を引き抜く。「それ」は善きものであるという知らせは届いていた。古代の森羅万象はこうした見事な健全さの中にある。それは決して死滅することはないと思う。」⁴² 神、普遍的なる実在を☉で表す、あるいは「雨が降る」(☂ rains。「それは雨を降らせる。」)ののように、表現しようのないものを☉で表すことは、英語やドイツ語で一般的なことである (Bs gibt「それがあたえる」||「ある」「起こる」)。プロティノス、そして新プラトン派の思考は、言語

と響き合う。「一週間」の「木曜日」の章からもう一カ所引用する。「ミミズは、バッタやコオロギと同様によい旅人であるが、ずっと賢い開拓者である。ミミズは全力を尽くして干ばつから飛び去っていったり、夏に向かつて率先して飛んで行くこともしない。私たちは悪の前から逃げることによってではなくて、悪の局面を克服するのである。あるいはその下に潜ることによって、悪を無効にする。ミミズが数インチさらに深く掘ることによって干ばつと霜を避けるのと同じように、^{フロロシイア}辺境は西にも東にも、北にも南にもなく、一人の人間が一つの事実に向き合うところなら——その事実は彼の近くにあるのだが——どこにでもある。彼とカナダの間、彼と沈んでいく太陽の間、さらに彼とそれとの間に、決着していない荒野がある。彼には、自分で樹皮のついている木を切ることから始めて、「それ」⁴³と向き合いながら丸太小屋を、今いる場所に建てさせよう。「向き合いながら」の強調はソロー自身によるが、ここには従来の実在論に向けてソローの姿勢が加味されているように見受けられる。屋根のない、野外の著書『一週間』は、古典的実在論に共振しながらも、天空にみなぎる精神(エーテル)が前面に出てくる。「一週間」の時間は、地質学的時間に依拠するところがあるとしても、「それ」によって包含されているものであったと言つてよいだろう。「建国」へと遡るソローの時間への旅は、ここに根ざしている。

五 むすび

『一週間』は自費出版に近い形態の刊行を余儀なくされ、負債の返済のためソローは鉛筆製造を中心にかなり働かねばならなかった。返済が完了したのは、出版から四年後であった。にもかかわらず、ソロー自身はこの本を失敗作とは決して見なさなかった。死の床にいたるまで、さらなる推敲と、客観的可能性はほとんどなかったが、新

たな版による再版の気持ちをいだけ続けた。妹ソフィアに、この本の最終章の朗読を頼むのは、死の数時間前である。

『森の生活』は生前に再版こそされなかったが、そこそこ売れた。だが、刊行後十三年たつても、半数以上売れ残っている『一週間』にソローは固執し続ける。『一週間』の「日曜日」の章に、コンコード川の本流メリマック川を遡り、ニューハンプシャー州に入ろうとするところで、かつてこの川の源流から海までたどったときのことを思い出す場面がある。

「堂々とし遠慮がちな山脈のふもと近くで、この川はささやくようにして始まり、湿った原生林を通りながら、その精髓を受け取る。熊はその水を飲み、植民者たちの小屋が離れて建ち、流れを横切るものはほとんどない。無名のいくつかの小さな滝がこの流れをひとりて享受している。水面には「ヘラジカの丘」、「干し草山」、キールサージの山の頂が映り、ティーターンの墳丘のようにまどろんでいる。：長々と、意味をたつぷりたたえながらこの川はベミゲワセツトという意味は翻訳できないまま、家畜が草を食べているヘーリオン山「ケンタウルスの住むギリシャの山」とオッサ山「ギリシャのテッサリア地方の山」の傍らを流れる。そこは山のニンフであるオレイアデス、樹のニンフであるハマドリユアス、泉のニンフであるナイイアスによって育てられた無名の詩歌女神たちがたびたび訪れ、まだ口のつけられていない詩的靈感を与えるヒツポクレネー「ヘリコー山にある泉」から貢ぎ物を受け取る。大地、大気、火、水があり、まさしく、これは川である。そして下っていく。

神々はこの川を純化し

ニューイングランドの人々のために

すべての丘にその流れをめぐらす。

ここで野生の美酒を一杯飲んだ私は

再びヘリコーン山の泉を

味わうことはしないであろう。

現実には川を漂いながら、さらにその川を源流から海へたどったかつての日々を思い出しながら、ソローは神話的時間に入っていく。実は『一週間』は随所に神話への言及に溢れている。すでに触れたように「時間」の探究のために、ソローはコンコード北橋に留まらなかつた。コンコード北橋の出来事は近代の政治思想の領域として十分に理解可能である。しかし「川」を探究の道として選んだソローはさらに遡る。川とは何なのか。川を見つめ、川を漂うことは、「世界最後の日」や至福千年論とは異なる見方、姿勢である。川は人を時間へと誘う。それは建国へ、神話的時間へと向かう。先住民にたいするソローの非常に深い両面価値的な眼差しは、歴史的時間に留まることはできなかつた。

森、草原、そしてコンコードという町はある意味で「閉じられている」。だからこそそれは政治的行為の舞台となつた。それに対して川はある意味で「開かれている」。つまり行為の舞台のところ留まらない。舞台を支える共同の社会(ソローの言葉ではそれは「森羅万象」^{ユニヴァース}にあたる)に私たちは元来加わる存在であることの発見、これが川が「開かれている」ことの象徴的な意味であろう。ソローの思想は「閉じられている」森と「開かれている」川の両面から考える必要があるのではないだろうか。ソローが最後まで『一週間』に固執した意味をここに限定してしまつてよいとは思わない。しかし、政治思想のソローを考えると、『一週間』は私たちが近代の枠組に距離をおきながら、その傍らで担うべき課題を含んでいると思わざるをえない。

注

- (1) たとえばプリンストン大学出版会刊行の『ヘンリー・D・ソロー著作集』では、「改革論集」(一九七三年刊)として一冊にまとめている (*Reform Papers, The Writings of Henry D. Thoreau*, Princeton University Press, 1973)。その中には「市民政府への抵抗」「マサチューセッツ州の奴隷制」「ジョン・ブラウン大尉を弁護して」「ジョン・ブラウンの最後の日々」「原則のない生活」など十一篇が収められている。
- (2) ソローの場所と政治的行為に関しては、次の二つを参照されたい。山口晃「ソローへの旅のはじまり」(ソロー『一市民の反抗』文遊社、二〇〇五年)、「屋根裏部屋と草原、そして……」(ソロー『生き方の原則』文遊社二〇〇七年)。
- (3) ウォルター・ハーディング『ヘンリー・ソローの日々』山口晃訳、日本経済評論社、三六六頁。
- (4) 日本にかぎっても『森の生活』の最初の翻訳は、『森林生活』(水島耕一郎訳、文成社)として明治四十四年(一九一一年)に刊行され、その後も度重なる新たな訳が、実に約十七点、日本の読者に提供されてきた。長島良久『ウォールデン』邦訳史』『ヘンリー・ソロー研究論集』第三十号、日本ソロー学会、二一八―三九頁。
- (5) プリンストン版の解説者リンク・ジョンソンは『森の生活』は『一週間』の続編」と述べ、ベンギン・クラシックス版の解説者ベックも、両著作は「一組をなす書物」と言明している。
- (6) H. Daniel Peck, 'Introduction,' *Henry David Thoreau, A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, Penguin Books, 1998, p.xiii.
- (7) *Ibid.*, pp.xiii-xiv.
- (8) Henry D. Thoreau, *A Week on the Concord and the Merrimack Rivers*, Princeton University Press, 1980, pp.24-5.
- (9) *Ibid.*, p.50.
- (10) *Ibid.*, p.53.
- (11) Peck, *op.cit.*, p.xv.
- (12) Thoreau, *A Week*, p.6.
- (13) *Ibid.*, p.213.
- (14) ソロー『森の生活』飯田実訳、岩波文庫、上巻一五〇―一頁、下巻二四頁。
- (15) Peck, *op.cit.*, p.xvi.

- (16) *Ibid.*, p.xix.
- (17) Bob Pepperman Taylor, *America's Bachelor Uncle : Thoreau and the American Polity*, University Press of Kansas, 1996, p.15.
- (18) テーラーは論旨を明瞭にするため、エマソンとソローの対比、相違に力点を置いている。しかし次の点は公平を図るため触れておかねばならない。後にソローが『一週間』の実質的執筆の場となるウォールデン湖畔の土地を、エマソンが購入するのが、一八四四年十月であるが、その同じ年エマソンは、奴隷制廃止運動に向けて公的な自らの立場を明確にする。そして八月ソローの母シンシアに促され、コンコードで演説する。それは、歴史的な説明に始まり、力強い演説であった。つまりこの演説は、一般的な倫理ではなく、具体的な政治的事実を強調する話し方(文体)であった。だからこそソローは後日、この演説が印刷されるための手配に協力した。ちなみに第一教会の寺男が集会を知らせる鐘を鳴らすのを否むと、ソローが「教会に駆けて行き、自らの手で綱を力強く握り、エマソンの演説に聴衆が集まるまで、鐘を鳴らした。」
- Robert Richardson Jr., *Henry Thoreau : A Life of the Mind*, University of California Press, 1986, pp.146-7.
- (19) Taylor, *op.cit.* pp.16-7.
- (20) *Ibid.*, p.18.
- (21) 飯田実「ソローにおける「場所の精神」」『アメリカ研究』16、アメリカ学会、一九八二年、参照。
- (22) Taylor, *op.cit.*, p.21
- (23) Thoreau, *A Week*, p.56
- (24) Taylor, *op.cit.*, pp.24-5.
- (25) Thoreau, *A Week*, pp.320-24.
- (26) Taylor, *op.cit.*, p.28.
- (27) *Ibid.*, p.28.
- (28) *Ibid.*, p.31.
- (29) ハーディング『ヘンリー・ソローの日々』前掲書、四九五頁。および *The Journal of Henry D. Thoreau II*, Houghton Mifflin Company Boston, 1906, pp.173-180 参照。
- (30) 日本のある社会思想家とは、私が十数年来、研究個人誌を刊行している石川三四郎であり、西洋のある政治哲学者とは

やはりこの十数年にわたって三つの訳書に取り組んだエリック・フェーゲリンを指している。

- (31) Richardson, *op. cit.*, p.25.
- (32) このときソローは原語(ドイツ語)で読んだ。ソローはハーバード大学在学中から、古典語以外にも複数の近代言語の習得に熱心であった。
- (33) ハーディング『ヘンリー・ソローの日々』前掲書、六五六、六六一頁。
- (34) Richardson, *op. cit.*, p.148.
- (35) ソロー『森を読む・種子の翼に乗って』伊藤詔子訳、宝島社、一三三頁。
- (36) Thoreau, *A Week*, p.7.
- (37) Henry Thoreau, 'Autumnal Tints,' *Wild Apples and Other Natural Essays*, edited by William Rossi, University of Georgia Press, 2002.
- (38) ソロー『野生の果実』伊藤詔子・城戸光世訳、松柏社、二〇〇二年。
- (39) *Ibid.*, p.351.
- (40) チャールズ・ライエル Charles Lyell (一七九七―一八七五) はスコットランドの地質学者。『地質学原論』全四巻(一八二七)の著者。
- (41) Peck, 'Introduction,' *op. cit.*, pp.xx~xxi.
- (42) Thoreau, *A Week*, *op. cit.*, p.173.
- (43) *Ibid.*, p.304.
- (44) *Ibid.*, pp.83~4.
- (45) 文学史においても『一週間』の意義が認められるまで一世紀かかっている。多くの批評家が『一週間』刊行(二八四九年)当初のJ・R・ローウェルの否定的な評価に同意してきた。F・O・マシーセンが『アメリカのルネッサンス』で『一週間』と『森の生活』の成長には重要な類似性があることを述べたのは、ようやく一九四一年であった(F・O・Mathiesen, *American Renaissance*, Oxford University Press, 1941)。それをさらに拡充する形でシャーマン・ポールが『一週間』は「入念に有機的な」形をした作品であると主張したのは、二〇世紀も後半に入っていた(『アメリカの岸辺』Sherman Paul, *The Shores of America*, The University of Illinois Press, 1958)。『一週間』が刊行されてから百年余り評価を高めると

なかつたことについては、リント・ジョンソンの解説が詳しい (Link Johnson, 'Historical Introduction', *A Week*, Princeton University Press)。